

3年間の交流協会での勤務を終えて

福増 伸一

私は、愛媛県からの派遣で、平成24年4月1日から平成27年3月31日まで公益財団法人交流協会に勤務しておりました。自治体としては、福岡県に次いで2例目、愛媛県としては初代の派遣職員として、平成24年度の1年間は東京本部において、平成25年度及び26年度の2年間は台北事務所において勤務したところ、3年間の派遣業務の概要、派遣を終えての所感などをご報告いたします。

まず、愛媛県から交流協会に職員を派遣することとなった経緯を簡単にご説明します。愛媛県の県庁所在地は松山市で、同市には松山空港がありますが、台湾においても、台北市には松山区があり、さらに台北市内には松山空港という世界でも類の無い同名の空港があります。さらに、松山市にも台北市にも全く同名の松山駅が存在するなど、偶然にせよ多くの共通点があります。

こうした共通点などが契機となり、まずは民間交流がスタートし、そこから松山市、さらには愛媛県と交流が広がる中で、愛媛県松山市の道後温泉と台湾台北市の北投温泉との交流などが生まれ、これら交流は台湾での愛媛県の知名度の向上にも繋がり、台湾からの愛媛県への旅行者の増加といった形としても目に見える結果が出るようになりました。

台湾が誇る世界一の自転車メーカーであるジャイアント社と愛媛県との交流も生まれ、愛媛県全体と台湾の交流が本格化する中、さらなる交流の拡大や愛媛県のかんきつ類等の台湾での販路拡

大、かねてよりの目標の一つであった松山空港発→松山空港着という世界でも類を見ない同名空港間でのチャーター便の就航の実現などを本格的に進めるため、愛媛県から台湾に職員を派遣し、現地の最前線で愛媛県と台湾の交流をサポートすることを目的として、交流協会への職員の派遣が決定し、私はその初代職員として着任しました。

字数も限られているため、簡潔なご報告となりますが、交流協会への派遣期間中には、念願であった上述の松山-松山チャーター便が就航したほか、しまなみ海道と日月潭との姉妹自転車道の締結、松山駅と松山駅の姉妹駅交流など、話題性に富む様々な交流が進んだほか、愛媛のものづくり企業の台湾での商談会の開催やかんきつ類のプロモーションなど、経済交流においても数多くの事業が展開され、現地でそれらの事業をサポートすることができました。

私が3年間の任期を終えたあとも、同様に愛媛県の職員が後任として切れ目無く台北事務所へ赴任しており、愛媛県が現地で事業を展開する上での貴重な足がかりとなっています。

ここまでは愛媛県職員としての観点での記載となりましたが、交流協会での3年間は、愛媛県の事業に限らず、寧ろ、交流協会の職員として経済交流や文化交流の数多くの業務を担当する機会をいただきました。

24年度は東京本部の貿易経済部において、日本の主に中小企業から参加を募集して台湾で開催される見本市に出展するなど、日本と台湾の経済交

流にかかる業務を担当するとともに、台北への赴任前に東京本部で勤務することで、交流協会の台湾での事業の全体像を把握するとともに、駐日台北経済文化代表事務所等との交流を通して、愛媛県一県だけではない、幅広い視点で台湾と日本の関係について理解することができました。

25年4月1日に台北事務所に着任しましたが、24年度の勤務経験をふまえていたため、非常にスムーズに新しい環境に馴染めるとともに、戸惑うことなく新たな業務をスタートできたと感じています。

台北事務所においては、経済交流のみならず、文化交流についても業務を担当することとなり、文化室と経済室を兼任する主任として、薬事規制、建設・鉄道交流などの経済室の業務を担当すると同時に、奨学金、青少年交流などを文化室として担当することとなりました。それに加え、四国の観光・経済交流も担当し、非常に幅広い業務を同時にこなすこととなりました。

同時期に複数の担当業務が重なり、さらに派遣元の愛媛県の台湾での事業も重なるような事態が何度もありましたが、同じ台北事務所で勤務する同僚や派遣元の理解・協力もあり、各業務に支障をきたすことなく無事にこなすことができ、自身にとっても非常に貴重な経験となりました。

担当した業務の中には、自治体では担当することの無いような性質の業務もありましたが、自治体での経験はそういった新しい業務を担当する上でも有用であることを実感し、また、台北事務所で経験した業務は、同じ業務が派遣元には無くても、それら業務の進め方などのスキルや業務を通して得られた人脈などは派遣期間が終了した後も役立つ大きな収穫となったと感じています。

台湾現地で生活し、そして台湾の方と仕事を進めてきた中で、個人的に特に印象的であったのは、日本において広く共有されているであろう台湾観は現実の台湾から離れつつある、ということを経験した点です。

例えば、八田興一技師など、日本統治時代のインフラ整備などについて、台湾で使用されている学校の教科書などにおいても肯定的な記述が見られます。他方、領土問題や歴史認識等には様々な意見があり、ニュースや新聞などメディアでは日本に対する厳しい意見も増えつつあります。台湾においてそういった現状を知ること、ただ単純に台湾＝親日と捉えるのではなく、様々な複雑な要素があり、それらを経てなお、日本と台湾は特別な絆をもった心と心の通い合うパートナーである、と実感できた点は、やはり台湾での勤務を通して得られた収穫の中でも重要なポイントであると考えています。

現在、台湾では若者を中心に韓流が大人気であり、また、中国からは非常に多くの観光客が押し寄せ、さらに、台湾の芸能界からも非常に多くの俳優や歌手が中国に進出するなど、台湾における情勢は目まぐるしく変化しています。

そういった変化を前に、これまでの先人の交流の実績のみを頼りに、台湾は親日であると安心してしまっているのではなく、これまでの良好な関係をベースとして、次世代の日本人と台湾人がより深く、幅広く交流を進めることで、急速に変化する社会情勢の中でも揺らぐことのない確かな日台関係を築いていけるよう、台湾での勤務を経験した一人として、業務内外のあらゆる点で微力ながら継続して関わっていきたいと思います。

(了)